

【1D：後背位で結合】

レイヴンは素早くサキュバスのバックを取ると後背位で結合した。

「ああんっ……」

腰をしっかりと鷲掴みにしてピストンをしてやると、サキュバスはどうにかして振り払おうとジタバタと抵抗したが、膂力の差が大きく逃れられる気配は一切なくなった。

「やめてっ……」

押さえつけて腰をふっているとサキュバスはしきりに首を回して、後ろに振り返ろうとしていた。首の筋を痛めそうなぐらいに曲げる仕草はあまりに不自然だったから、いぶかしんでよく観察をしてみると、唇に塗られた赤い口紅がキラキラと輝いていた。

振り向きざまに見える赤が視界に入ると、意識が遠くなって強制的に魅了されるような感覚がした。胸の内にキスがしたいなどという阿呆な欲求が発生するようで、レイヴンは彼女の引いた赤い口紅は特殊な魔道具で、男性を致命的に魅了させるのではないかという見当をつけた。

「ひんっ……」

疑心の目で赤い唇を見ているにも関わらず、強制的な魅了によって意識がぼんやりとし始めた。それは強い抵抗の意志があるのにも関わらず睡眠薬で眠らされるような感覚に似ていて、一度でもそれに飲み込まれたらしばらくは現実に戻ってこれないだろうという予感をさせた。

その赤い唇を視界に入れておいていいことはなにもないだろう。レイヴンはサキュバスの体を持ち上げると近くの柱に押しつけた。これならいくら振りかえっても決して顔は視界に入らないだろう。

「んっんっ……あ、あーん！！」

そのままバックで腰を振り続けていると、特に何事もなくサキュバスは絶頂し、その身体を消滅させた。

(さてと……)

レイヴンはこの塔の最初の敵を倒してあらためて今の戦いを思い返すことにした。キス以外の責めはいたって平凡な下級淫魔らしい強さだったが、赤い口紅と肉厚の唇の威力は桁違いだった。

まず最初にキスされたときの魂を奪うような恍惚感を思い出した。その威力は絶大で、

もし判断を間違っていたら即死していたかもしれないと考えると恐ろしくなった。

さらにはそれを戦闘中にあまり気に留めることもできなかった。普通はサキュバスの得意技が判明すれば、否が応にもそれを恐れて警戒心が生じるはずなのだが、今回はそれがなかったのである。もし楽天的にキスをし続ける選択をしていたら結果はどう転んだかわかったものではない。

自分の心をよく見つめなおすと、危険を察知する動物的な勘というものが効かなくなっていて、淫魔に搾り取られることをよしとする心情が根源から発生しているようだった。もしこの気持ちが極端に増幅すれば、自我を失って淫魔を崇拜し、喜んで淫蕩に我が身を捧げるだろう。

どうやらここらへんに数々の性戦士を返り討ちにしてきた塔のカラクリがあるのかもしれない。レイヴンは気を引き締め直すと塔の探索を再開した。

《ステージクリアー！》